



読売俳壇

矢島 渚男 選

鶴凍てぬ片脚立ちに身を載せて

水戸市 中崎 正紀

【評】一点を凝視した写真である。片脚で立ち頸を体につっ込んで眠っているのだろう。正月の句は「こと」事柄の句が多い。それらしく作った事柄の句は陳腐になりやすく、こうした写真の句を望みたい。

老いのなき長寿はあらず梅真白

吹田市 末岡たかし

【評】健康に長寿を保っていても、いつしか老いが忍び寄ってくるのが宿命なのだ、と自分に言い聞かせている。ことしの梅は大変早かった。赤城は父大利根は母年明くる

群馬県 真下 忠男

【評】赤城山を仰ぎ見、利根川の流るを眺めて暮らす日々。大きな自然を父母として。横座りしてゐるキリンの日向ぼこ

茨木市 瀬戸 順治

蕉翁も蕪村も貧し初曆

三木市 神沢 誠吾

雑煮食いその後日課の散歩なり

筑西市 枝 孚

芸術は狂気の欠片梅が咲く

日南市 宮田 隆雄

賽銭の両替をして初詣

東京都 家泉 勝彦

花八つ手斑に五人の孤老あて

東京都 田中 靖人

その女口づけのごと蜜柑喰ふ

川越市 伊藤 康昭

宇多喜代子 選

風貌の浮かぶ癖字や年賀状

横須賀市 大塚遊球子

【評】印字の賀状が多くなつたいま、手書きの賀状が届いた。一目で「この字はあの人だ」とわかる一枚である。風貌のよさまでが伝わる。正月の空の高さに大気吸ふ

西尾市 小笠原玲子

【評】正月の空の晴れは、快調な一年のスタートを感じさせる。青い空を見上げて、胸一杯に空気を吸い込む。気持ちのいい句だ。初孫をまあるく抱きて初日の出

下関市 木嶋 政治

【評】初孫を可愛いとおもう気持ちが「まあるく」に出尽くしている。孫を可愛いとおもうのは当り前のこと。孫俳句が歓迎されないのはそれが過剰になるところ。銀杏散るここより学徒戦場へ

狭山市 平野 和士

寒鯉のぐらりと揺れて泥けむり

越谷市 安居院康之

花筒の供華とちこめて初氷

八尾市 仲谷加代子

寒桜や月が大きく附いて来る

京都市 根来美知代

新聞の雪便りより読みはじめ

東大阪市 山本 隆

事務始まらずコピー機オンにして

西条市 平井 辰夫

風邪に臥すたゞ天井の広さかな

春日部市 竹部 公子

正木ゆう子 選

シャッターを肩で押し上げ初仕事

東京都 本多 明子

【評】店舗の手動シャッターをガラガラと引き上げ、途中から肩で押し上げている。普通なら目を留めないほどのさりげない動作。新年の季語と取り合わせて、新鮮。去年今年貫く母の看取りかな

匠瑳市 椎名 貴寿

【評】このような年越も多かっただろう。「去年今年貫く棒の如きもの」(高浜虚子)を拝借する遊び心で、大変さが少しでも和らぎますよう。明星にあかつき侍り初御空

取手市 小日向教明

【評】金星探査機あかつきが金星の周回軌道に無事投入され、間もなく迎えた新年。探査機が待ると思つて、何かわくわくする明星である。二日には二日の予定それぞれに

桐生市 周東 孝一

舞ひ終へて肩に休める獅子頭

小金井市 高橋 広子

初曆その一日の暮れにけり

国分寺市 越前 春生

一歳に十二人向く年賀かな

相模原市 大谷千恵子

カート押し仕事始やリネン室

鈴鹿市 岩口 巳年

年移る探査機は星巡りつつ

横浜市 平井 慶一

深海も成層圏も淑気満つ

宇陀市 泉尾 武則

小澤 實 選

起重機の先端にある松飾り

さいたま市 薄井 逸走

【評】日本人はさまざまところに松飾りを付ける。なんと高く伸ばしたクレーンの先端にも付けてあるというのだ。魔を払って、今年の高所での仕事の無事を祈っている。ペーパーの語源パピルス白障子

東京都 後藤 博行

【評】紙という意味の英語ペーパーの語源は、古代エジプトの紙の一種パピルスまでさかのぼれるという。障子紙の白さに紙の歴史を思う。保母さんに幼き恋の雪つぶて

名古屋市 可知 豊親

【評】保育園の女性の先生を恋して、気を引こうと雪礫を投げているのだ。なんとという早熟だろう。雪礫の恋は類型だが、この句は新しい。白き息鏡にかけて鏡拭く

松山市 久保 栞

初空の無辺の青をことす

加須市 松永 浮堂

なまはげの隠れ煙草を赦されよ

秋田市 中村 栄一

水桶の凍りて鶏の啄き跡

太田市 阪本 和夫

天金にほのとほこりや冬館

長野市 小林 明男

鱈船の吃水深く着きにけり

千葉市 中村 重雄

ストーブや頭乾かす尻ふたつ

埼玉県 葛西 悦子